

算数・数学の学力と実践的指導力

会長 黒崎東洋郎

永い間岡山大学算数・数学教育学会を牽引されてきた岡山大学教育学部数学教室の高橋敏雄会長が本学会会員の熱望の中、ついに、会長職をお辞めになられました。本学会の発展にご尽力された功績は大きく、本学会会員一同を代表しまして衷心より感謝いたします。学会だよりに記述している経緯を経て、私が本学会の会長職をお引き受けすることになりました。歴代の会長と違って微力ですが、学会会員の皆様のご指導とご支援を賜り、本学会が岡山県の算数・数学教育の充実・発展に寄与できるように誠心誠意頑張りますので宜しくお願いします。

さて、既にマスコミ報道でご存知の学会会員も多いと思いますが、岡山大学教育学部は平成18年度から教員養成に特化した学部で改革されます。埼玉大学、京都教育大学、岡山大学の3大学が教員養成に特化した大学へと改革されます。岡山大学教育学部の最重点課題は、教員を希望する学生に、採用当初から学級を担当しながら教科指導を大きな支障を生じることなく実践できる「実践的指導力の基礎」を養成することです。教員養成を目指す大学・学部は、岡山大学に限らず、どの大学・学部も実践的指導力の基礎を育成するための特色ある「コア・カリキュラム」を構築しようとしています。岡山大学では、「教科指導力」「生活指導力」「マネジメント力」「コーディネート力」の4つの力を実践的指導力と考え、教育実地研究を中核にした「コア・カリキュラム」を構想して、その準備を急いでいます。

平成10年度告知の学習指導要領で指導内容が30%縮減されたのを契機に、「数学離れ」「算数・数学の学力低下」の論議は未だに盛んになされています。算数・数学の学力論議を通して、社会が算数・数学教育の在り方に興味・関心を示してくれることは、算数・数学を担当する教員にとって望ましいことだと考えることができます。平成15年度の教育課程実施状況調査では、算数・数学の学力は、平成13年度よりも少し成績が総論としてよいという報道がなされました。一方、PISA報告では、数学分野の成績は、2000年では参加国中第1位でしたが、2003年では世界第6位であったため、数学の学力が下がっているという報道がなされました。本当に、子ども達の算数・数学の学力が危惧されている通り下がっているのか、学力が向上しているのかは、今の段階でははっきりしません。

算数・数学の学力低下が生じれば、究極すれば、日本の国力低下に繋がりがかねません。しかしながら、算数・数学の学力向上のためには、縮減された指導内容を単に元に戻せばよいという単純なものではないと思われます。算数・数学の学力向上の要因の1つに、私たち算数・数学を担当する教員の指導力を上げることができます。教員として、子どもの学力低下の原因を学習指導要領や学び手である子どもに求める以前に教師の指導力に原因を求めたいものです。20歳代の若手教員と30代・40代という中堅教員では、算数・数学の実践的指導力は当然違います。本学会は小さな学会ですが、若年教員から中堅教員まで様々なステージに立つ教員がいます。若年教員はともすれば1時間の授業の成否に一喜一憂しやすいものです。一方、中堅教員ともなれば、「単元レベル」「学年レベル」「小・中連携」及び「中・高連携」といった算数・数学科のカリキュラムも視野に入れた教科指導の在り方を考えた教育実践をするものと思われます。小さな学会だけに、各ステージに立つ様々な学会会員が有機的、機能的に連携していきやすく、これにより算数・数学の実践的指導力をブラッシュアップして頂きやすいと考えます。その具体的な場が、「6月の談話会（原則として第2週土曜日）」「10月研究発

表会（原則として第4週土曜日）となっています。

変化の激しい時代にあって教育改革もめまぐるしい昨今であります。こうした変化の時代に対応した新しい算数・数学教育の在り方が求められます。本学会も、新しい教育改革の方向性をきちんと視座に入れた取り組みをしていきたいと考えています。今回の学会誌「パピルス 第12号」では、新しい教育改革の方向性を踏まえた算数・数学教育の在り方を示すために、算数・数学教育を担当している指導主事の方々に特別寄稿をお願いしました。本学会会員の皆様が、算数・数学教育の新しい実践研究の方向性を読み取って、会員の皆様の実践的指導力の向上に結びつけば幸いです。特別寄稿をお願い申し上げました大月一泰、楠 博文（岡山県教育センター）、安井正郎（岡山市教育委員会）、片岡正樹（総社市教育委員会）、池本桂治（赤磐市教育委員会）の各先生方、紙面をもちましてお礼を申し上げます。